

シリーズ クルマと今を生きる

第1章 私たちと車の未来 Vol.13

クルマのある暮らしは人生観そのものを変える——。若者がクルマを所有しない時代、若者がクルマに魅力を感じない時代、そう言われる昨今においてなお、クルマに魅せられ、夢を抱き、心底楽しんでいる若いクルマ愛好家が必ずいる。その姿と生の声を辿りながら、次世代へ引き継がれているクルマ愛をシリーズで検証。自動車免許取得を目指している方々に夢や希望をうかがう

取材・写真/青柳 健司 (フォトライター)

【取材協力】中央バス自動車学校

札幌市北区新琴似8条西17丁目1-1
TEL 011-764-2525 社長:須貝 進 学校長:宮下 貴一郎

札幌市内では数少ない全車種教習指定校。普通免許、二輪、バス、大型特殊、けん引などに加え、高齢者講習、企業ドライバー講習、冬道講習などでも定評がある。能力開発助成金制度にも対応しており、また合宿プラン、ハイスピードプランなどニーズに応じた教習が受けられ、学生、社会人、高齢者と幅広い層に利用されている。



まえ であら え み
前寺 映見さん

札幌市在住・21歳
フロント業務

「同世代の男性はほとんどクルマを持っていますから、クルマ離れと言われてもピンとこないかな。」



やま もと り お
山本 莉央さん

札幌市在住・18歳
北海学園大学経営学部在籍

「親は共働きで忙しいのに、いつもちゃんと送り迎えしてくれました。私も将来はそうありたいです。」



今のうちに資格を取得

2件のアルバイトを掛け持ちしながら、現在北海学園大学の2部で経営学を学んでいる山本さん。目標額を貯めた後はアルバイトを辞めて、日中は専門学校に通う予定なのだが、その理由は、「将来は税理士になりたい」という大きな目標を立てているから。そのため「今、簿記は全商(全国商業高等学校協会 簿記実務検定)の2級ですが、社会に出ると日商(日商簿記検定)の資格が必要ですので、それに向けた勉強もしています」とも。そんな山本さんだからこそ、自動車免許は取得すべき資格のひとつといった意味合いが強いようだ。

もちろん、18歳の山本さんにとって、それだけが取得の動機ではない。「小学校の頃から、両親が毎年必ずキャンプに連れていかけてくれるんです。ロングドライブは時々飽きちゃうけれど(笑)、クルマの中から知らない土地の景色を見るのが大好きです。いつか自分で運転して、見たことのない風景に出会いたいんです」と瞳を輝かせる。

クルマ離れ世代とされることを、山本さんは「悪いことではないと思います」という。曰く「公共の交通機関を使えば、それだけ環境にも優しいし、それから交通事故の確率も少なくなります」。しかしその一方で「昼も夜も学校に通うようになったら、きっと今以上に私にとって時間は貴重なものになります。だから、クルマがどうしても必要という場面も多くなりそうですね。そんな時のために、今のうちにしっかりと免許を取っておかなきゃ」とニコリ。

ラパンが好き!

市内の某ホテルでフロント業務をこなしながら、心身ともに充実した日々を過ごしている前寺さん。高校を卒業後に思い切った下し

た決断が、その伏線となった。一旦は医療事務系の専門学校に進んだものの、わずか数ヶ月で中退。この時前寺さんは「笑顔で接客できるような仕事がしたい」と思い立ったのだとか。それがきっかけとなり、現在の職場に出会うことができたのだそう。

そんな前寺さんが、自動車免許取得を目指す理由はいたってシンプル。「友人たちとクルマでキャンプに出かけたり、夜景を見に行ったりするのが好きです。ただ、これまでは免許を持っている人に運転をまかせっきりでしたので、私も持っていれば交代で運転できるかなって」と屈託がない。しかし「親には、危ないからという理由で大反対されました。でも、自分で働いて貯めたお金で自動車学校に通うんだからって、押し切りました。結局、両親はそれぞれ一台ずつクルマを持っていることもあって、最後は折れて自動車学校を紹介してくれました」と笑う。

何を隠そう、前寺さんはすでに購入するクルマをピンポイントで絞り込んでいる。それは、スズキ・ラパン。「スタイリングも内装もカワイイので、すごく気に入っています。サイズも小さくて私にはちょうどよい感じ。私自身には白い服が似合わないのですが、ファッションアイテムも全くとっていませんが、実は白が大好きなので、クルマは絶対白にしたいです」と、話す瞳もハートマーク(?)

取材を終えて...

勉強とアルバイト励みつつ資格取得にむけた準備を着々と進めている山本さんと、目標に定めた仕事をすでに現実のものとした前寺さん。立場は違うようでも、自分らしく生きようとする思いは同じである。そんなお二人だから、クルマとも自分らしく接していくことになるだろう。クルマをステータスや自己表現の象徴と位置づける意義は確実にあるものだが、自分らしいか否かをあらためて問いかけてみることも必要なのかもしれない。